

石塚遺跡調査概報IV

—平成5年度、旭建設地区、平成6年度、日本海ホーム地区の調査—



1996年3月

高岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、資材置場造成に伴う石塚遺跡発掘調査の概要報告書である。

2. 調査地区は、次の2箇所である。

(1) 石塚遺跡旭建設地区

高岡市和田1170

平成5年5月17日～同年7月12日

(2) 石塚遺跡日本海ホーム地区

高岡市和田1172

平成6年4月11日～同年6月30日

3. 当調査は、平成5年度及び平成6年度の県単補助事業「市内遺跡試掘調査事業」として、高岡市教育委員会社会教育課が実施した。

4. 境地調査時（平成5、6年度）の調査関係者は次のとおりである。

社会教育課長：野村一郎

課長補佐：庭島誠一（平成5年度）

課長補佐：森 忠夫（平成6年度）

文化係、係長：大石 茂

係員：山口辰一

係員：榎本和代（平成5年度）

係員：根津明義（平成6年度）

5. 報告書作成は、平成7年度市単独事業として高岡市教育委員会文化財課が実施した。

6. 報告書作成時（平成7年度）の調査関係者は次のとおりである。

文化財課長：田村晴彦

〔埋蔵文化財係〕

主幹兼係長：石浦正雄

係員：山口辰一

係員：根津明義

係員：荒井 隆

7. 本書における遺構番号は、次のとおりである。

S D - 溝、S K - 土坑、S X - その他の遺構

8. 本書における遺物番号は、次のとおりである。

101～旭建設地区、弥生土器

201～旭建設地区、土製品

301～旭建設地区、石製品

401～日本海ホーム地区、弥生土器

501～日本海ホーム地区、石製品

9. 本書の執筆は、山口が担当した。

調査参加者名簿

発掘

大谷知可子、尾山久美子、開発由紀子、曲木直美

小林茂、板林靖子、杉本広政、高田えみ子

田中あけみ、寺井久子、道谷美奈子、中川恵子

西野千鶴、橋真理子、前田武國、牧野正子

三島幸代、水外 一郎

整理

東加世子、大谷知可子、小幡鲇子、尾山久美子

堀地慶子、佐野美香、清水千鶴、新谷晴紀子

高田えみ子、塚原望、寺井久子、土合良子

道谷美奈子、中尾賀妻子、中田郁子、中林靖子

中村恭子、中山麻紀、橋真理子、藤坡亞紀子

細呂木重樹、三島幸代、吉田亮子

目 次

例　　言

目　　次

I 序　　説	1
II 旭建設地区遺構	5
1. 土 坑	5
2. 溝	5
3. 凹 地	7
III 日本海ホーム地区遺構	8
1. 土 坑	8
2. 溝	11
3. 凹 地	11
IV 旭建設地区遺物	12
1. 土 器	12
2. 陶製品	13
3. 石製品	13
V 日本海ホーム地区遺物	14
1. 土 器	14
2. 石製品	15
VI 結　　語	16

挿　　図　　目　　次

第1図 遺跡位置図 (1/5万)	1	第6図 旭建設地区土坑実測図 (1/80)	7
第2図 調査地区位置図 (1/5,000)	2	第7図 日本海ホーム地区調査風景	8
第3図 遺構全体図 (1/400)	3	第8図 日本海ホーム地区遺構図 (1/200)	9
第4図 旭建設地区調査風景	4	第9図 日本海ホーム地区土坑実測図 (1/80)	10
第5図 旭建設地区遺構図 (1/200)	6		

図面目次

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 図面1 遺物実測図 旭建設地区 弥生土器 | 図面5 遺物実測図 旭建設地区 石製品 |
| 図面2 遺物実測図 旭建設地区 弥生土器 | 図面6 遺物実測図 日本海ホーム地区 弥生土器 |
| 図面3 遺物実測図 旭建設地区 弥生土器 | 図面7 遺物実測図 日本海ホーム地区 弥生土器 |
| 図面4 遺物実測図 旭建設地区 弥生土器 | 図面8 遺物実測図 日本海ホーム地区 石製品 |

図版目次

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 図版1 遺構 旭建設地区 | 図版9 遺構 日本海ホーム地区 |
| 1. 全景(北上方) | 1. 土坑SK99全景(東) |
| 2. 全景(西上方) | 2. 溝SD45土層断面(北) |
| 図版2 遺構 旭建設地区 | 図版10 遺構 日本海ホーム地区 |
| 1. 土坑SK99全景(東) | 1. ヒスイ勾玉501出土状態(南西) |
| 2. 土坑SK101全景(北) | 2. ヒスイ勾玉502出土状態(南東) |
| 図版3 遺構 旭建設地区 | 図版11 遺構 日本海ホーム地区 |
| 1. 土坑SK103全景(南西) | 1. ヒスイ勾玉503出土状態(南西) |
| 2. 土坑SK103遺物出土状態(南西) | 2. ヒスイ勾玉503出土状態(東) |
| 図版4 遺構 日本海ホーム地区 | 図版12 遺物 旭建設地区 |
| 1. 远景(南上方) | 弥生土器 |
| 2. 全景(北上方) | 図版13 遺物 旭建設地区 |
| 図版5 遺構 日本海ホーム地区 | 弥生土器 |
| 1. 全景(東上方) | 図版14 遺物 旭建設地区 |
| 2. 全景(上方) | 弥生土器 |
| 図版6 遺構 日本海ホーム地区 | 図版15 遺物 日本海ホーム地区 |
| 1. 土坑SK107全景(南) | 弥生土器 |
| 2. 土坑SK107遺物出土状態(南西) | 図版16 遺物 旭建設・日本海ホーム地区 |
| 図版7 遺構 日本海ホーム地区 | 石製品 |
| 1. 土坑SK107土層断面(西) | |
| 2. 土坑SK107土層断面(西) | |
| 図版8 遺構 日本海ホーム地区 | |
| 1. 土坑SK110全景(西) | |
| 2. 土坑SK110土層断面(東) | |

I 序 説

遺跡概観

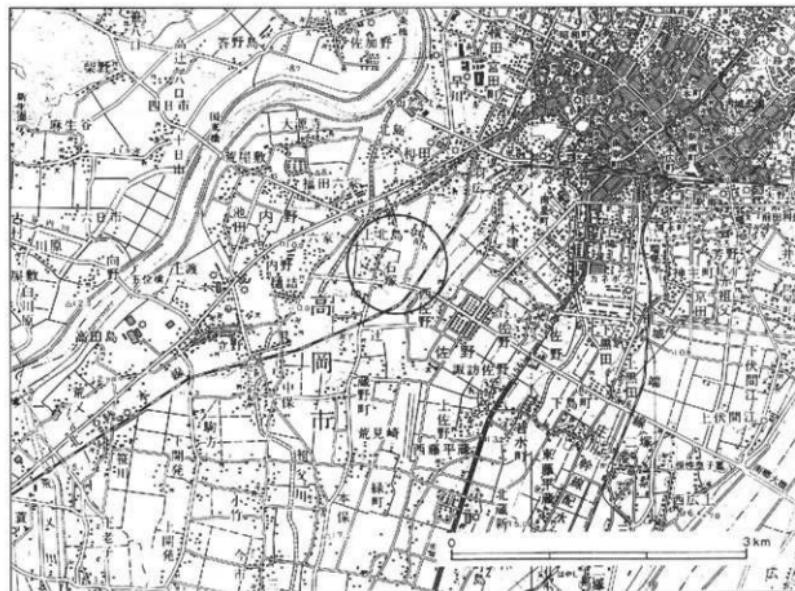
当「石塚遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の西南西約3.0kmに位置する。遺跡の東端部をJR北陸本線が走っている。東側には和田川が西側には祖父川がそれぞれ北流している。この両河川に挟まれた標高11~12mの微高地に当遺跡が立地している。この付近は、県西部の大河、庄川の形成した扇状地の末裔部に当たる。和田川、祖父川とも、扇状地特有の湧水を水源とする河川である。

遺跡の範囲は、南北600m×東西470mを計る。当遺跡の調査は、ここ数年間、開発工事に伴い毎年実施しているが、これらを通して、従来想定していた範囲より拡大することが判明してきており、このような範囲と把握している。

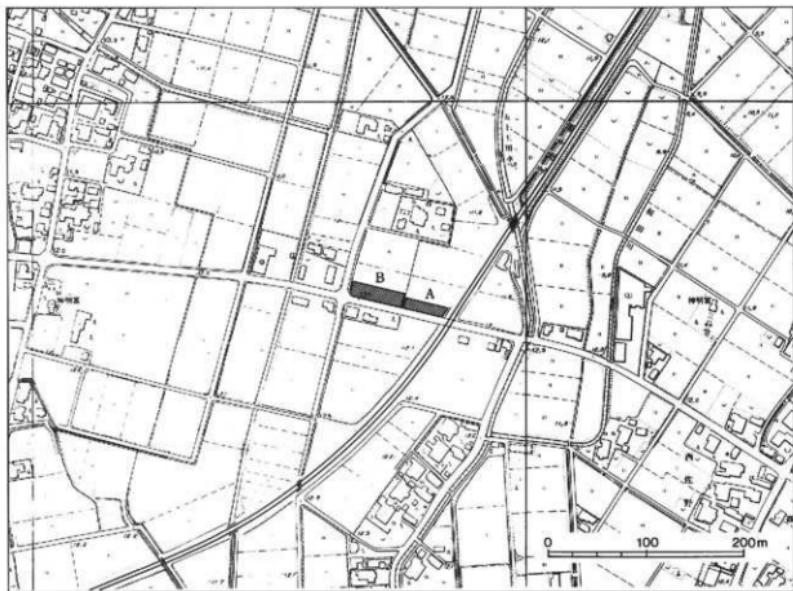
当遺跡は、石塚地区における発掘調査により、遺跡の存在が明確になり、石塚遺跡と称されてきた。その後遺跡の範囲は石塚のみではなく、和田や北側の一部は上北島まで拡がっていることが判明してきている。

調査地区的位置

主要地方道高岡・婦中線は、小杉町、大門町を東西に走り西進し、庄川を南郷大橋で渡り、高岡市域へ入



第1図 遺跡位置図 (1/5万)



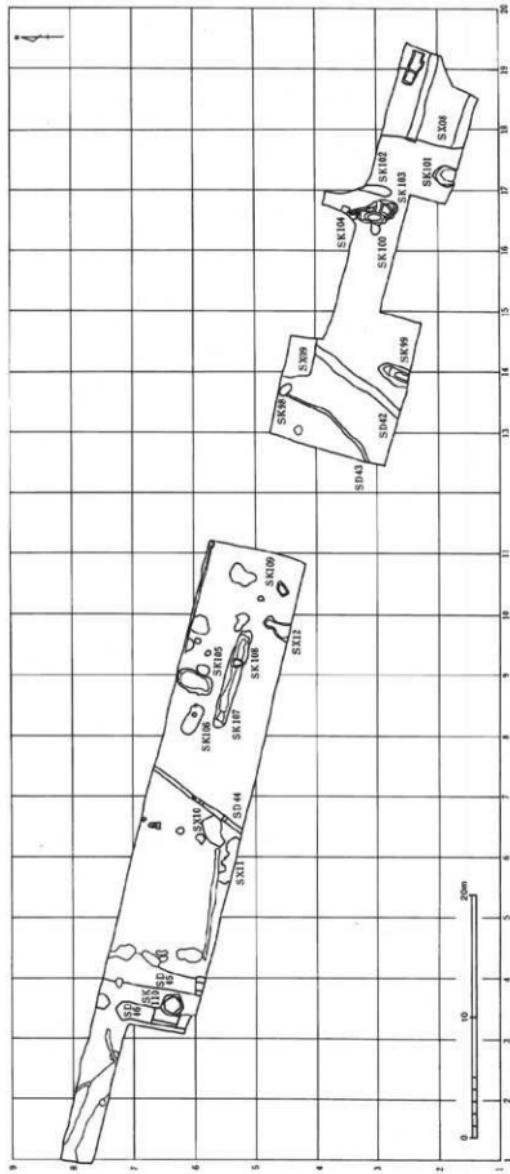
第2図 調査地区位置図 (1/5,000)

A-旭建設地区、B-日本海ホーム地区

る。暫くして北方へ折れて、JR高岡駅方面へと伸びるものである。庄川を渡って後、北方へ折れずに、そのまま西北西方向へ直進すれば、JR城端線を越え、国道156号線と交差し、泉ヶ丘団地方面へ向かう。そして庄川より約3.0kmで、JR北陸本線の踏切に至る。この付近が当石塚遺跡の南東側端部で、石塚遺跡の南部地区を縦貫する形でさらに西北西方向へ向かっている。この道路の踏切を越えた北側に、今回報告する「旭建設地区」と「日本海ホーム地区」とが位置している。東側が「旭建設地区」で西側が「日本海ホーム地区」である。以前はこの道路までを石塚遺跡の南側範囲と推定していたが、「旭建設地区」をはじめとした調査により、石塚遺跡の範囲が、この道路を越えてさらに南側へ拡がっていることが判明してきており、先述したように南北600m×東西470mの範囲としている。

調査に至る経緯

今回報告する両地区とも、農地転用による資材置場造成にかかるものである。それぞれ仲介者からの連絡により、開発計画を知り、協議の結果試掘調査を実施することに至った。「旭建設地区」は仲介の間口不動産、地主の高田小七郎氏、開発側の株式会社旭建設、「日本海ホーム地区」は仲介のラック商事、地主の林好雄氏、開発側の有限会社日本海ホームとの承諾・協力を得て、調査を実施した。調査地区名は、これら開発側の名称を使用させて頂いている。



第3図 遺構全体図 (1/400)



第4図 旭建設地区
調査風景

現地調査と報告書作成

今回の調査は、両方共に試掘調査ではあるが、できる限り内容把握に努め、本調査に準じるものとした。現地調査の測量基準杭は平面直角座標系に合わせ、5mメッシュで設定した。隣接した地区であるので1冊の報告書に所取することとし、本書となった。遺構番号は、昭和61年度の調査地区的ものからの連番とした。グリッドの名称については、同地区を統一したものとして表し、X=1、Y=1の地点は、原点より、西へ16.265km、北へ80.86kmの位置である。

旭建設地区的調査概要

調査地区は、ほぼ東西、厳密には東南東～西北西方向へ長い長方形の敷地である。ここへ幅4mで東西に試掘坑を穿つ形で発掘区を設定した。そして遺構等が検出された部分を中心に、北側や南側へ拡張する形にした。調査対象面積は477m²で、212m²の発掘調査を実施した。

検出遺構は、土坑7基（SK98～104）、溝2条（SD42～43）、凹地2基（SX08～09）である。

出土遺物は、土器類では弥生土器である。それ以外では、土製品として土製紡錘車、石製品として擦切具、石鎌である。

日本海ホーム地区的調査概要

調査地区は旭建設地区的西側で、旭建設地区と同様、ほぼ東西、厳密には東南東～西北西方向へ長い長方形の敷地である。発掘区は幅8mで調査地区的北側に設定し、南側は排土置場とした。北西側は幅約2.5mとなっているが、この部分は擾乱が確認されたこともあり、これ以上の拡張は実施しなかった。調査対象面積は825m²で、350m²の発掘調査を実施した。

検出遺構は、土坑6基（SK105～110）、溝3条（SD44～46）、凹地3基（SX10～12）である。

出土遺物は、土器類では弥生土器、珠訓である。それ以外では、石製品として、ヒスイ勾玉、玉紙石、石包丁、石鎌である。

II 旭建設地区遺構

1. 土 坑

土坑 S K98

調査地区的北西側、S D43の北側に接して検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸1.15m、短軸0.72mを計る。小型でピットに近い土坑である。上面で確認したのみであり、S D43との新旧は不明である。出土遺物は弥生土器である。図示した弥生土器は、111の一部、117.135である。

土坑 S K99

調査地区的南西側で検出された。南側は調査地区外となる。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸2.58m以上、短軸1.64m、深さ86cmを計る。出土遺物は弥生土器である。図示した弥生土器は、102.108.112.118～121.123.124.131.133.134.141である。

土坑 S K100

調査地区的中央東寄りで検出された。S K103に切られている。平面形は楕円形と推定される。規模は、長軸0.81m以上、短軸0.64mを計る。上面で確認したのみで、深さ等は不明である。出土遺物は弥生土器である。図示した弥生土器は、126である。

土坑 S K101

調査地区的南東側で検出された。南側は調査地区外となる。平面形は円形に近い楕円形と推定される。規模は、長軸1.72m以上、短軸1.70m、深さ63cmを計る。出土遺物は弥生土器、土製筋锤車1点（202）である。図示した弥生土器は、105.107.115.122.125.128.136.138である。

土坑 S K102

調査地区的中央東寄りで検出された。北側は調査地区外となる。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸2.66m以上、短軸0.76mを計る。上面で確認したのみで、深さ等は不明である。出土遺物は弥生土器である。図示した弥生土器は、132である。

土坑 S K103

調査地区的中央東寄りで検出された。S K100を切っている。S K104と一部重複している。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸3.32m以上、短軸2.02m、深さ72cmを計る。出土遺物は、弥生土器、擦切具1点（302）、石錐1点（303）である。図示した弥生土器は、101.104.106.109.113.114.116.129.130.137である。

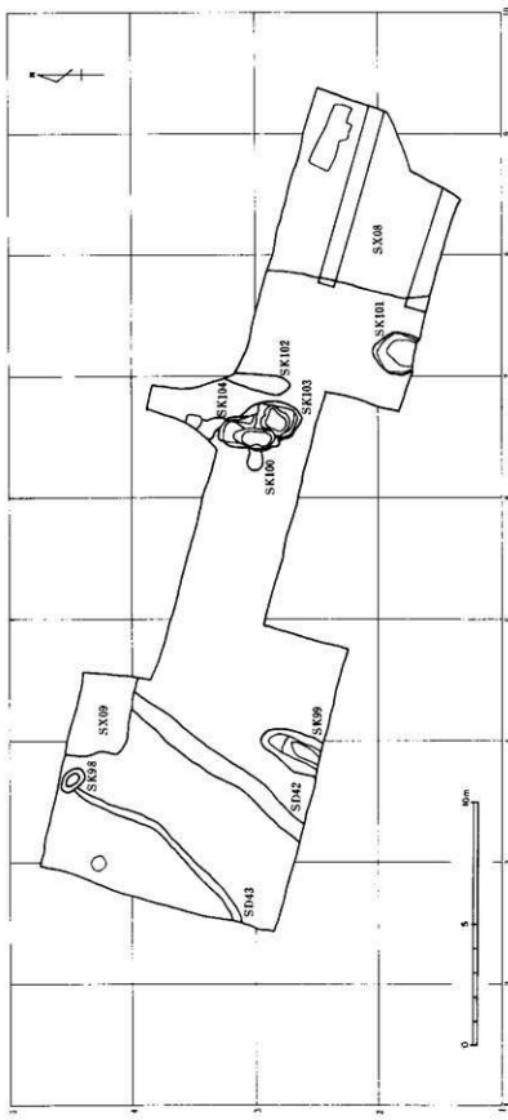
土坑 S K104

調査地区的中央北東寄りで検出された。北西側は調査地区外になる。北側は擾乱に切られている。南側はS K103と一部重複する。不正形の土坑である。一部のみ掘り下げ、弥生土器片が出土している。

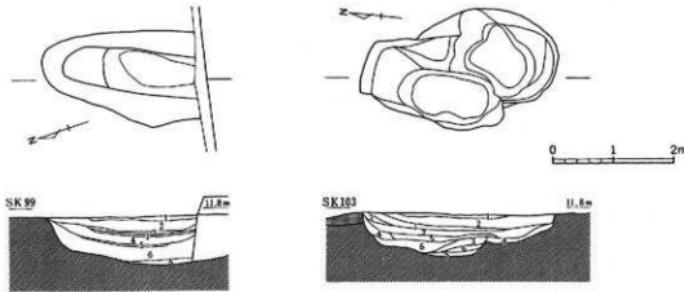
2. 溝

溝 S D42

調査地区的東側で検出された。北東～南西方向へ走る溝である。北東側はS X09に達している。南西側は



第5図 旭建設地区構造圖(1/200)



1. 暗灰色シルト。
2. 灰色シルト。
3. 地山（淡黃白色シルト）ブロック。
4. 明灰色シルト、地山粒混じり。
5. 黒色シルト、炭化物混じり。
6. 黑灰色シルト、炭化物混じり。

1. 暗灰色シルト。
2. 灰色シルト。
3. 地山（淡黃白色シルト）ブロック。
4. 明灰色シルト。
5. 黒色シルト、炭化物多量混じり。
6. 暗灰色シルト、灰色シルト、地山ブロック混含土。

第6図 旭建設地区土坑実測図（1/80）

調査地区外である。規模は幅70~88cmを計る。上面で確認したのみで、深さ等は不明である。

溝S D 43

調査地区的東側で検出された。北東~南西方向へ走る溝である。北東側はSK98に達している。南西側は調査地区外である。規模は幅20~32cmを計る。上面で確認したのみで、深さ等は不明である。

3. 凹 地

凹地S X 08

調査地区的東側で検出された。調査地区的東側一帯に拡がる凹地状のものである。東西にサブレンチを2箇所設定して、深さが72cmであることを確認した。出土遺物は弥生土器、擦切具1点（301）である。図示した弥生土器は、103.110.139.140である。

凹地S X 09

調査地区的北西側で検出された。造構の一部のみの検出で、南西側以外は調査地区外である。規模は、南北2.20m、東西3.60m以上を計る。上面で確認したのみで、深さ等は不明である。出土遺物は、弥生土器である。図示した弥生土器は、111の一部143である。

III 日本海ホーム地区遺構

1. 土 坑

土坑 S K 105

調査地区的東側北寄りで検出された。北側は調査地区外になる。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸3.18m以上、短軸1.66m、深さ61cmを計る。出土遺物は、弥生土器、勾玉1点(503)である。図示した弥生土器は、401~403.406~408.412~414である。勾玉は当遺跡の南側隅部、南壁より約50cm内方からの出土である。

土坑 S K 106

調査地区的東側北寄りで検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸2.74m以上、短軸1.10m、深さ5cmを計る。出土遺物は弥生土器である。なお、図示した勾玉(501)と石鎚(507)は、当遺構付近から遺構確認時に出土している。勾玉は約70cm北西側、石鎚は約1.20m西側から出土している。

土坑 S K 107

調査地区的東側で検出された。当遺構の底面下より、S K 108が検出されている。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸8.22m、短軸1.24m、深さ44cmを計る。出土遺物は、弥生土器、勾玉1点(502)である。図示した弥生土器は、411.416.422.424.425.428である。勾玉は当遺構の西側隅部、東壁より約50cm内方からの出土である。

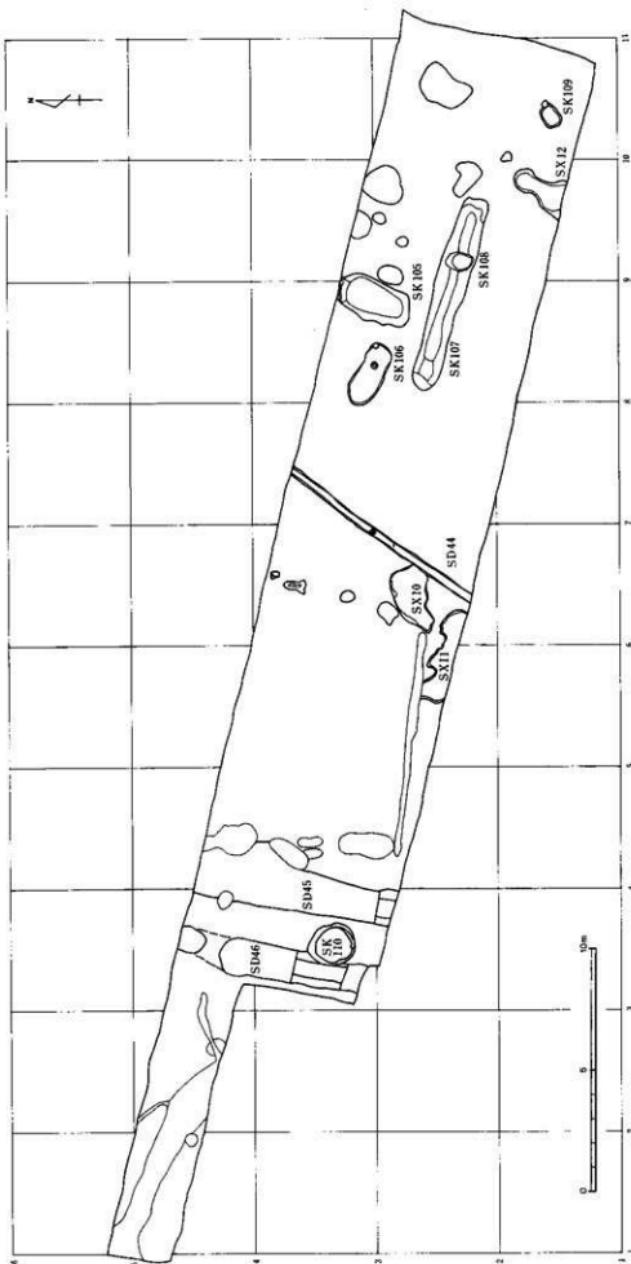
土坑 S K 108

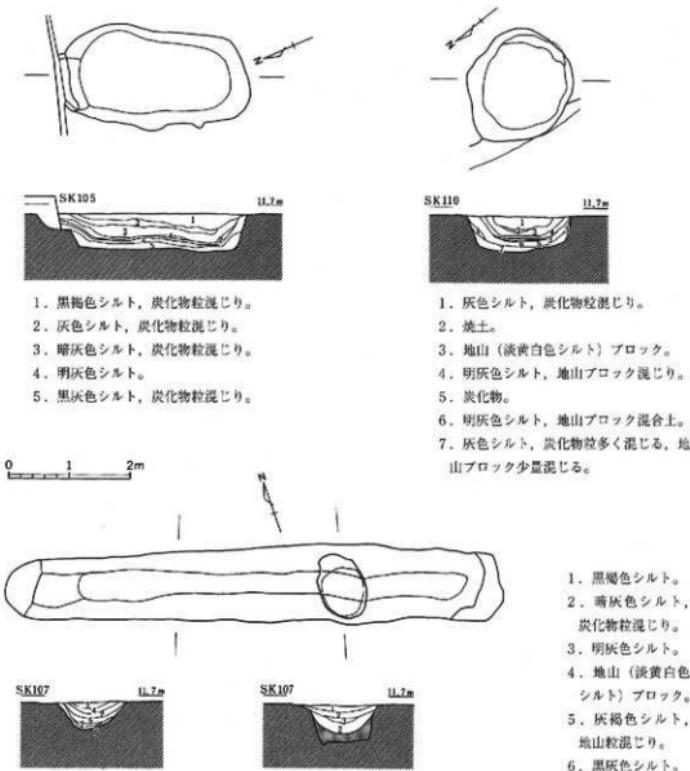
調査地区的東側で検出された。S K 107に上部削平を受け、この遺構の底面下より検出したものである。平面形は円形に近い楕円形を呈し、規模は、長軸1.12m、短軸76cm、深さ22cmを計る。出土遺物は弥生土器である。図示した弥生土器は、405である。



第7図 日本海ホーム
地区調査風景

第8図 日本海水浴場地図 (1/200)





第9図 日本海ホーム地区土坑実測図 (1/80)

土坑 SK109

調査地区的南東側で検出された。小さな擾乱に一部切られている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は、長軸1.06m、短軸73cm、深さ9cmを計る。出土遺物は弥生土器片である。

土坑 SK110

調査地区的西側で検出された。西側をS46に切られている。平面形は円形に近い梢円形を呈し、規模は、長軸1.82m以上、短軸1.72m、深さ57cmを計る。出土遺物は弥生土器である。図示した弥生土器は、404.410.417～421である。

2. 溝

溝 S D 44

調査地区の中央部で検出された。北東～南西方向へ走る溝である。凹地 S X 10と一部重複する。長さ9.02mに亘り検出され、調査地区外へと延びるものである。幅28～40cm、深さ12cmを計る。出土遺物は弥生土器片である。

溝 S D 45

調査地区の西側で検出された。南北に走る溝である。擾乱に数箇所切られている。長さ8.24mに亘り検出され、調査地区外へと延びるものである。幅140～264cm、深さ23cmを計る。掘り下げは南側端部で一部のみ行った。出土遺物は珠洲である。掘り下げた部分から出土している。

溝 S D 46

調査地区的西側で検出された。南北に走る溝である。S K 110を切っている。長さ7.65mに亘り検出され、調査地区外へと延びるものである。北側では一部途切れている。幅116～172cm、深さ53cmを計る。掘り下げは溝の南側部分でS K 110と重複している所で行った。出土遺物はない。

3. 凹 地

凹地 S X 10

調査地区的中央南西寄りで検出された。S D 44と一部重複している。平面形は不正形である。

凹地 S X 11

調査地区的中央南西寄りで検出された。擾乱に一部切られている。南側は調査地区外である。平面形は不正形である。

凹地 S X 12

調査地区的南東側で検出された。南側は調査地区外である。平面形は不正形である。

IV 旭建設地区遺物

1. 土 器

弥生土器（図面1～4）

壺 101。全体の形態が判明する壺である。丸い胴部より、口縁・頸部は外反して外上方へ拡がる。法量は、口径15.9、器高35.0、底径6.6、胴部最大径25.0cmを計る。口端部外面には、櫛描列点文が付く。調整手法は、内面が、刷毛目・ナデ・指圧である。外面は刷毛目がベースになり、胴部下部はヘラ磨きされている。

壺口縁・胴部 102。丸い胴部より、口縁・頸部は外反して外上方へ拡がる。法量は、口径18.0、胴部最大径26.8cmを計る。口端部は波状になり、口端部内面には櫛描列点文が付き、外面には刺突文が付く。肩部外面には、上方より櫛描横線文、櫛描簾状文、櫛描横線文が各1条付く。調整手法は、口縁・頸部が刷毛目、胴部内面がナデ、胴部外面が刷毛目である。

壺口縁部 A 103～110。外上方へ開く口縁部で、口端部には違いがある。

A 1 ; 103.104。口端部外面に櫛描交差列点文が付く。103の口端部内面には櫛描列点文が付く。104の口端部内面には2条の羽条列点文が付く。

A 2 ; 105。口端部外面下方に櫛描刺突文が付く。

A 3 ; 106～108。口端部が波状になるもの。

A 4 ; 109。口端部がやや凹縫気味になるもの。

A 5 ; 110。口端部が内傾し、文差沈線文が付く。

壺口縁部 B 111。口縁部が受け口状に直立するものである。口端部外面には、1条半の櫛描羽条列点文が付く。

壺胴底部 A 112。大型の壺の胴下底部である。残存器高16.6cm、残存胴部最大径35.3cm、底径8.3cmである。調整手法は、胴部内面が刷毛目、外面がヘラ磨きである。

壺胴底部 B 113。超大型の壺の胴底部である。残存器高36.3cm、残存胴部最大径53.4cm、底径12.2cmである。調整手法は、胴部内面がナデ、外面が刷毛目である。

壺底部 114～115。壺の底部である。

壺口縁部 A 116.117。大型の壺で、口径は29.6cmと23.6cmを計る。口縁部は外反して外上方に開く。

116の口端部には櫛描刻み日文が付く。117の口端部は波状になる。

壺口縁部 B 118～122。通有の大きさの壺で、口径は20.6～19.4cmを計る。すべて口端部外面には櫛描刻み日文が付く。調整手法は、口縁部と胴部外面が刷毛目を基調とするものである。119と120は全体の形態が判明するものである。119は胴上部の張りがやや強く、口縁部は外反して外上方に開く。底部は突出気味になる。これに対して120は胴上部の張りが弱く、口縁部は緩く外反して外上方に開く。底部は胴下部よりスムーズに移行している。

壺口縁部 C 123.124。小型の壺で、口径は18.0cmと15.2cmを計る。123は、口縁部が緩く外反して外上方に開く。124は、口縁部が強く外方に屈曲して開く。123の口端部は波状になる。124の口端部には櫛描刻み日文が付く。

甕底部 125~143。甕の底部である。

2. 土製品

土製紡錘車（図面5）

弥生土器片再利用の紡錘車で、201.202の2点である。201は3分の1程度の破片で、径約3.8cmと推定している。202は紡錘車に製作する途中のものである。弥生土器の内面から穿孔されてはいるが、穿孔は貫通していない。

3. 石製品

擦切具（図面5）

擦切具でいわゆる「石鋸」である。301.302の2点で、いずれも完存品ではない。301は長さ4.5cm、幅3.5cm、厚さ2~4mmで、龍文岩である。302は長さ6.1cm、幅3.7cm、厚さ5mmで結晶片岩である。

石鎌（図面5）

無茎式の石鎌で303である。安山岩製で、身部は二等辺三角形である。長さ4.35cm、幅1.20cm、厚さ0.6cmを計る。

V 日本海ホーム地区遺物

1. 土 器

弥生土器 (図面 6 ~ 7)

壹口縁部 A 401~403。外反して外上方に拡がる口縁部で、口端部外面には櫛描刻み目文が付く。402は口端部内面に櫛描羽状列点文が付く。調整手法は、内外面とも刷毛目が基調である。口径は17.0cm前後である。

壹口縁部 B 404。小型の壺の口縁胴上部である。張りのない肩部より、口縁部は外反して外上方に拡がる。口端部外面には櫛描刻み目文が付く。頸部から肩部には、櫛描の直線文、波状文、直線文が付く。口径は10.0cmである。

壹口縁部 C 405。外上方に開く口縁部で、器壁が薄く特徴的である。口端部外面には刻み目文が付く。口縁・頸部には、櫛描の直線文と波状文が交互にそれぞれ3条確認できる。波状文は直線的で折れ曲がっている。口径は19.0cmである。

壹口縁部 D 406.407。口縁部が受け口状に直立するもので、やや大型の壺である。406は口端部外面に櫛描羽状列点文が付く。垂下部分は波状になる。口端部内面には櫛描刻み目文が付く。口径は26.2cmである。407は口端部外面に1条半の櫛描羽状列点文が付く。口径は24.8cmである。

壹口縁部 E 408。口端部が上下に肥厚するものである。口端部には櫛描文が交差して付く。

壹口縁部 F 409。直線的に延びてきた口縁部が、折り返したように肥厚するものである。

壹口縁部 G 410。口縁部が内弯気味に直し、口沿部が肥厚するものである。

壹頸肩部 411.412。丸い肩部から直立する壺の頸部である。411は頸部に2条の貼り付け突帯文が付く。突帯文には指圧状の押さえがなされ凹凸がある。頸部から肩部への移行部分には、櫛描直線文が付く。肩部には櫛描列点文と櫛描波状文が付く。412は頸部に櫛描直線文、櫛描簇状文、櫛描直線文が付き、肩部への移行部分には、櫛描波状文が付く。肩部には櫛描直線文が付く。またこれらの文様帶の下方には山型の刻み目文が廻っている。

壹口縁胴部 A 413。大型の壺で、口径27.2cmを計る。口縁部は外反して外上方に開く。口端部は波状になる。肩部には櫛描直線文、櫛描簇状文、櫛描直線文が付く。

壹口縁胴部 B 414~416。通有の大さの壺で、口径は20.4~21.2cmを計る。414は張りのない胴部より口縁部は外反して外方へ開く。口端部は波状となる。胴部には櫛描の直線文と波状文が付く。415は緩く外反する口縁肩部を持つ。口端部は波状となる。416は肩下・底部以外の形態が判明するものである。張りのない胴部よりく字状に緩く折れる口縁肩部を持つ。口端部外面には櫛描刻み目文が付く。調整手法は、内外面とも刷毛目である。口径20.8、残存器高25.5、胴部最大径19.4cmである。

壹口縁胴部 C 417~419。小型の壺で、16.4~15.6cmを計る。口縁部は外反して外上方に開く。418.419の口端部は波状になる。

壹底部 420~430。壺の胴下底部である。

2. 石製品

勾玉（図面8）

ヒスイの勾玉である。

501；長さ1.70cm、幅0.80cm、厚さ0.60cm、孔径0.10～0.30cm。

502；長さ1.00cm、幅0.55cm、厚さ0.20cm、孔径0.10～0.20cm。

503；長さ0.80cm、幅0.50cm、厚さ0.30cm、孔径0.10～0.15cm。

504；長さ1.20cm、幅0.50cm、厚さ0.60cm。破片である。

砥石（図面8）

筋砥石や玉砥石と呼ばれている505で、砂岩製である。主要面には筋が5条付く。また別の1面には筋が2条付く。主要面は長さ8.8cm、幅7.2cmである。

石包丁（図面8）

石包丁の一部と解した506である。穿孔が1箇所付き、また別に小さな未貫通の穿孔がある。

石鎌（図面8）

有茎式の石鎌で、507である。鉄石英製で、長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.6cmである。

VII 結語

全体の概要

今回の調査は、「旭建設地区」と「日本海ホーム地区」の2箇所の調査地区である。この2地区を合わせた調査面積は562m²である。検出遺構は、両者合わせて以下のものである。

土坑13基（S K98～110）

溝5条（S D42～46）

凹地5基（S X08～12）

検出遺構のほとんどのものは弥生時代中期に属する。弥生時代中期以外では、日本海ホーム地区から検出された2条の溝、S D45とS D46が中世のものである。出土遺物も弥生時代中期のものがほとんどで、それ以外、中世の珠洲片等が少量出土しているのみである。

調査地区的位置

今回の調査地区は、当石塚遺跡の南側に位置している。当初この付近までが遺跡の南側範囲と推定していたが、この2つの地区的調査を通じて、弥生時代中期の遺構が多く検出され、遺物も多く出土したことにより、石塚遺跡がさらに南側へ拡がることが確実になった。

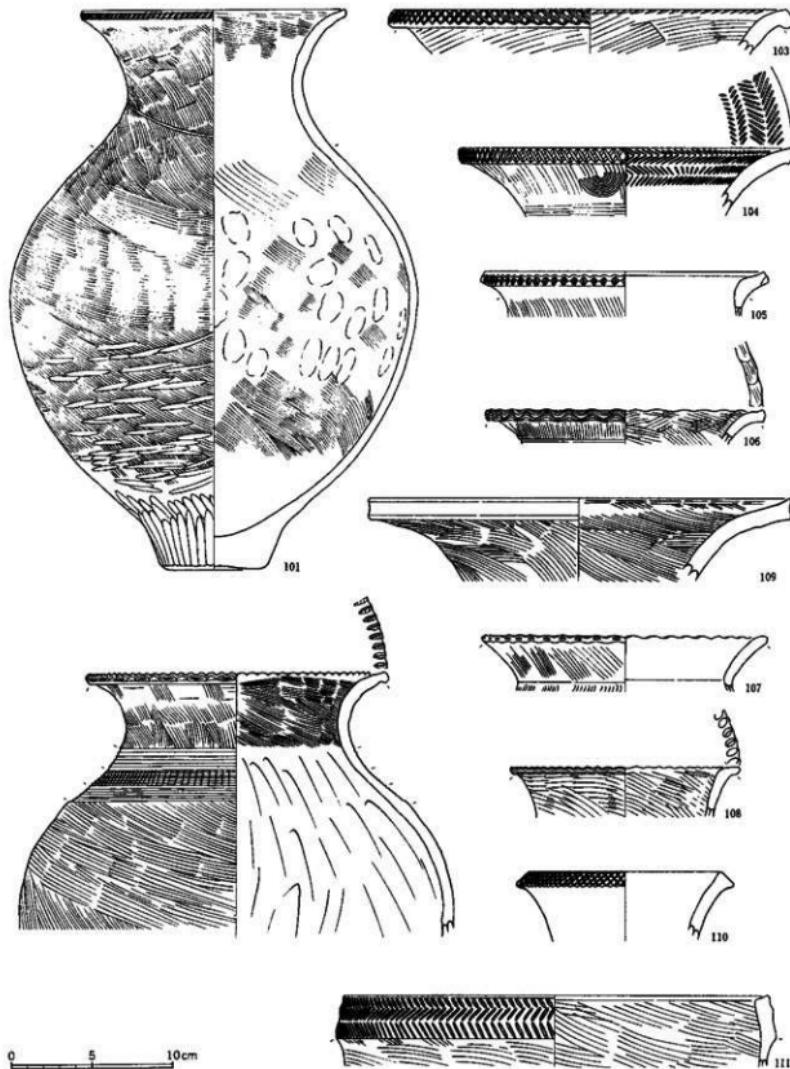
弥生時代中期の遺構

小規模な溝や、遺構として明確化しきれない凹地を除外すれば、遺構の多くは土坑である。これらについては、墳墓すなわち上塙墓と推定している。

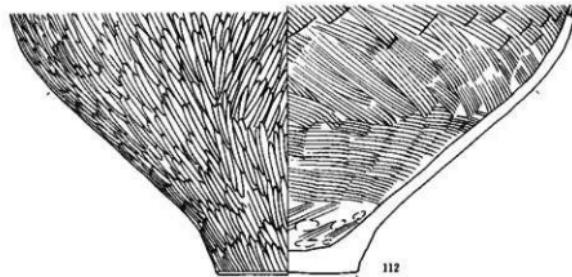
今回の調査地区周辺での調査では、弥生時代中期の遺構として方形周溝墓や土塙墓が多く検出されており、これらの地区、すなわち石塚遺跡の南側一帯が、当集落の墓域と位置付けることが可能と思われる。

図 面

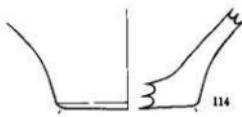
図面一 遺物実測図 旭建設地区



図二 遺物実測図
旭建設地区



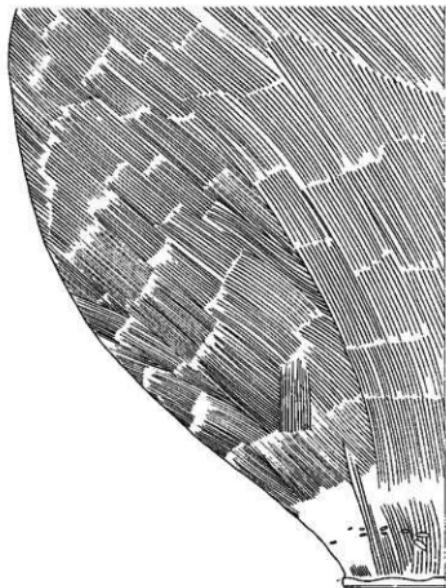
112



114



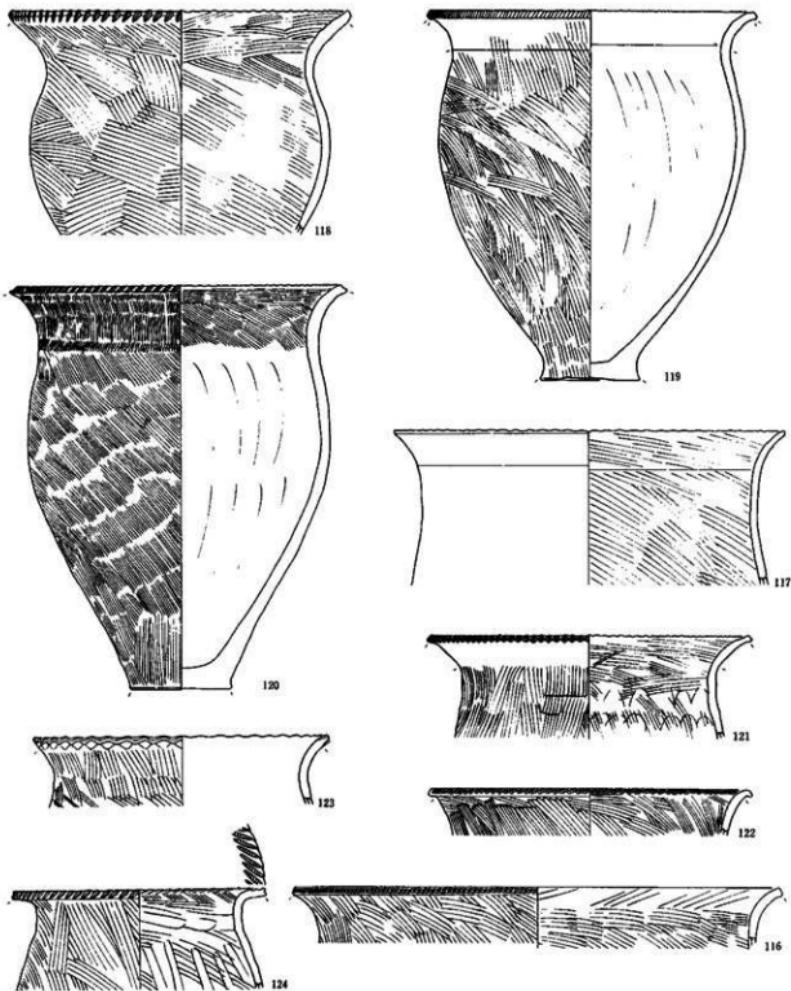
115



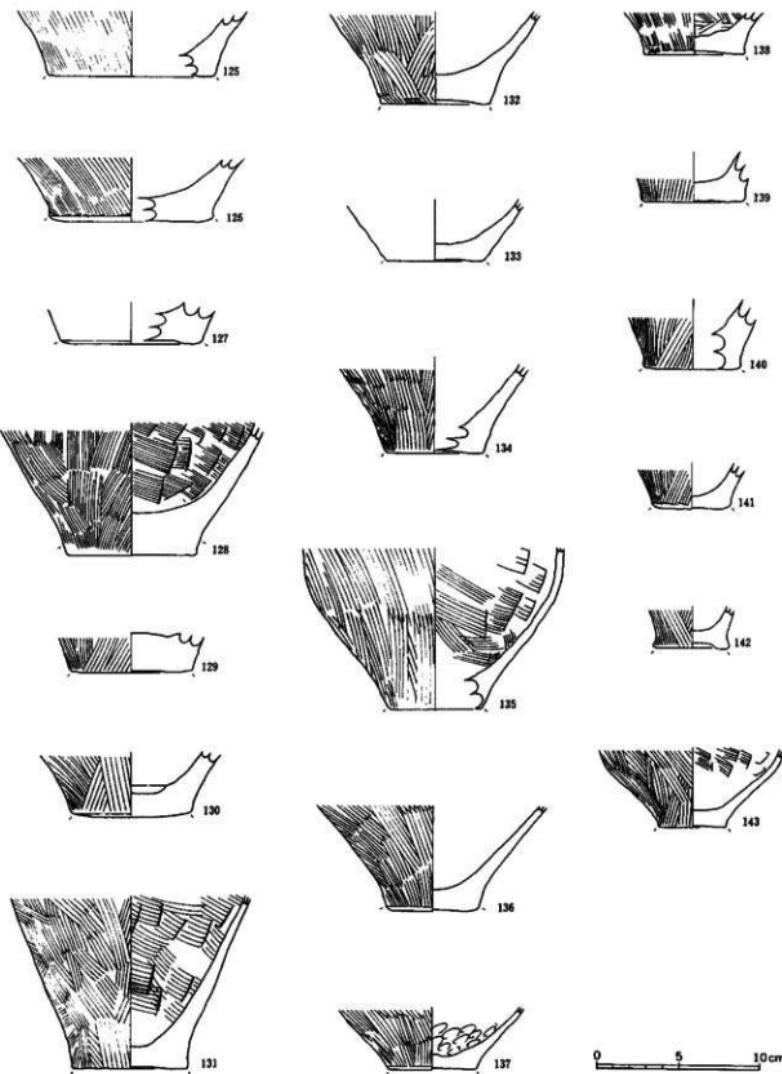
113

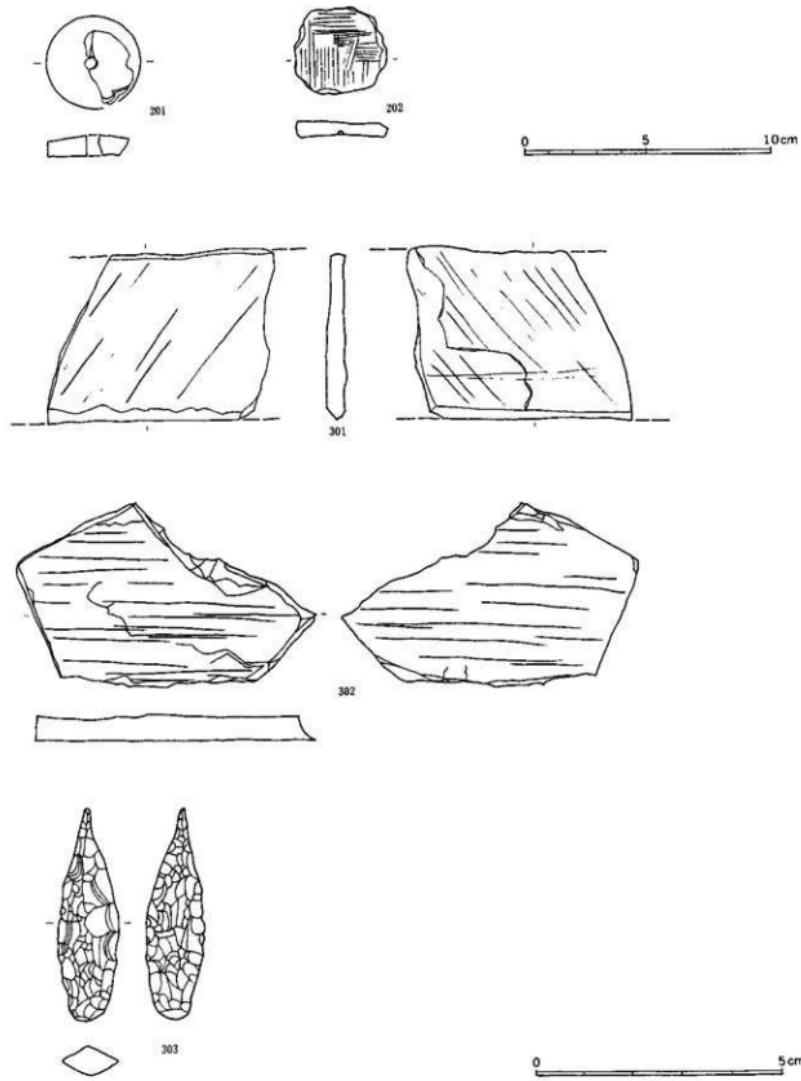
0 5 10cm

圖三 遺物大割図 施設設地区



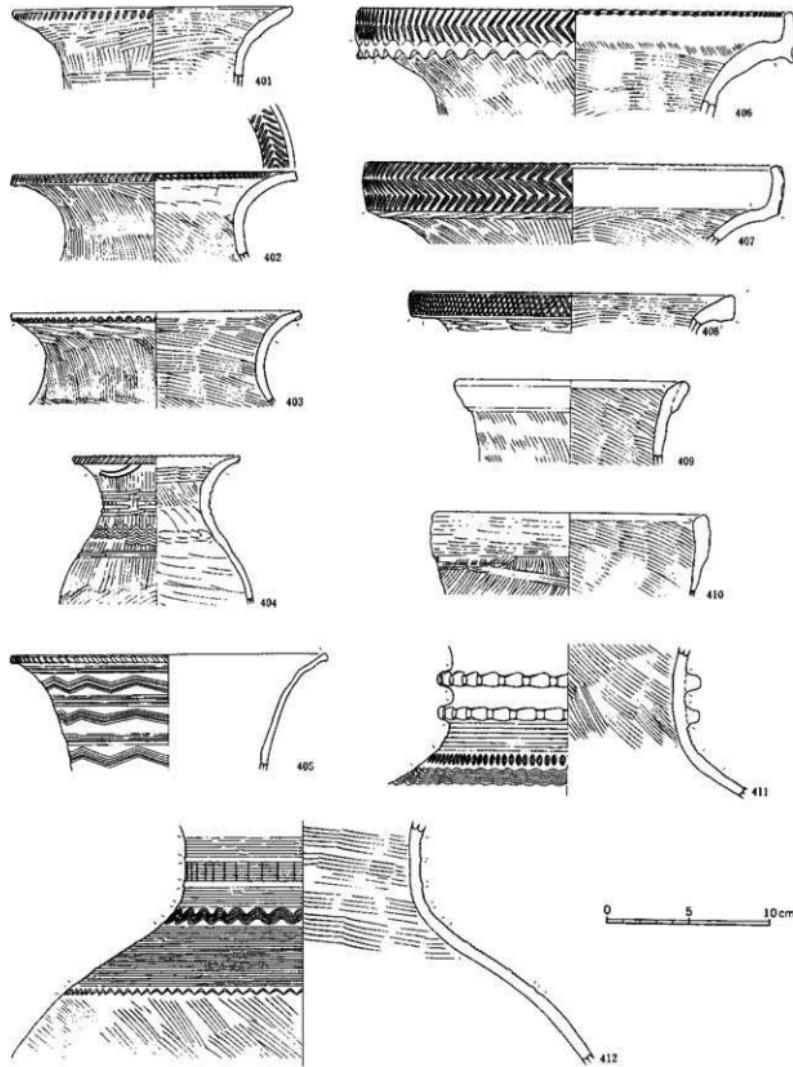
0 5 10cm



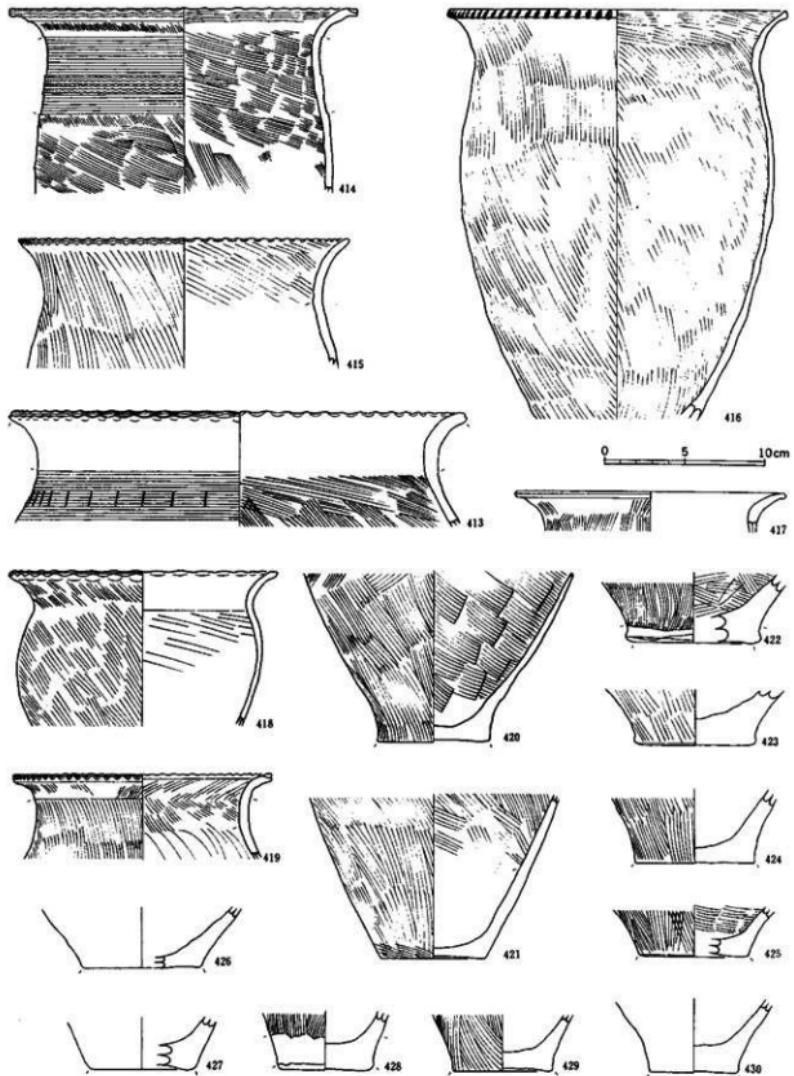


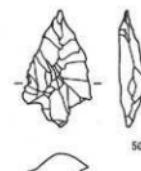
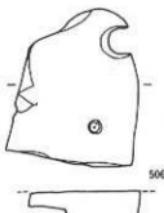
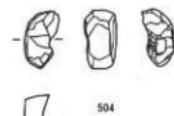
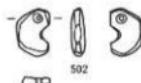
上製品 上製紡錘車；201.202
石製品 擦切具；301.302、石鎌；303

縮尺 1 / 2
実大

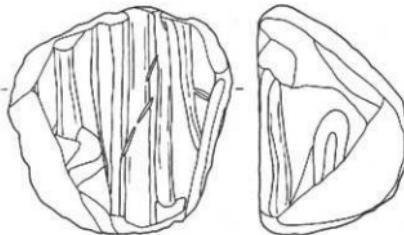
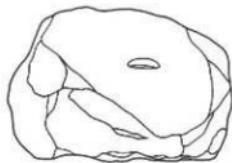


図面七 遺物実測図
日本海ルム地区

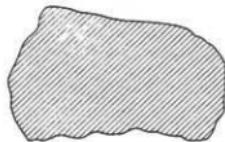




0 5 cm



505



0 5 10 cm

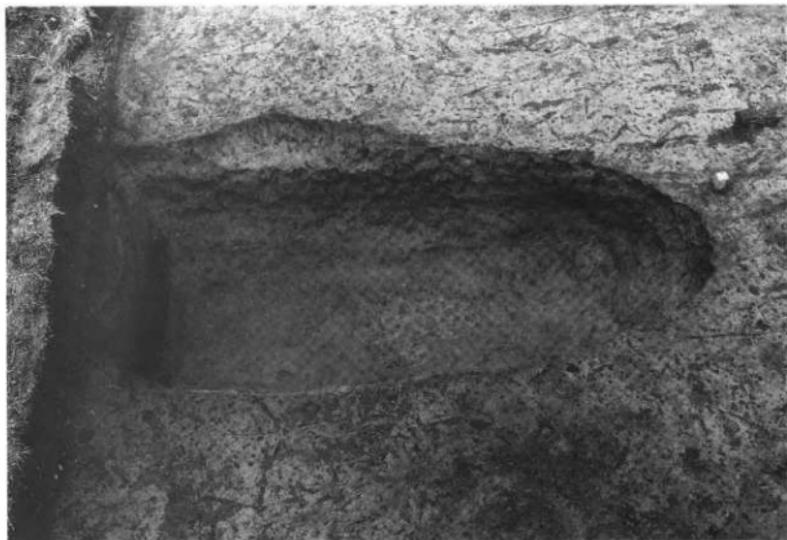
図 版



1. 全景（北上方）



2. 全景（西上方）



1. 土坑SK99全景(東)



2. 土坑SK101全景(北)



1. 土坑 S K103全景 (南西)



2. 土坑 S K103遺物出土狀態 (南西)

図版四
造橋 日本海示一ム地区



1. 遠景（南上方）

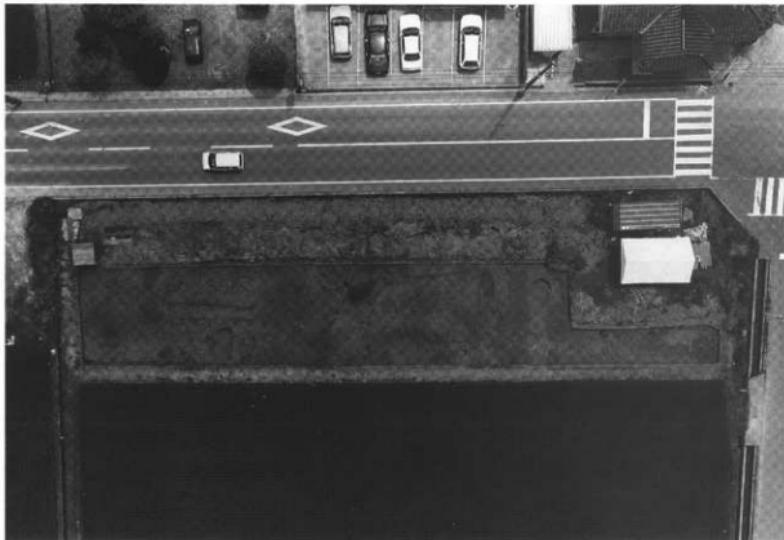


2. 全景（北上方）

図版五 遺構 日本海示一ム地区



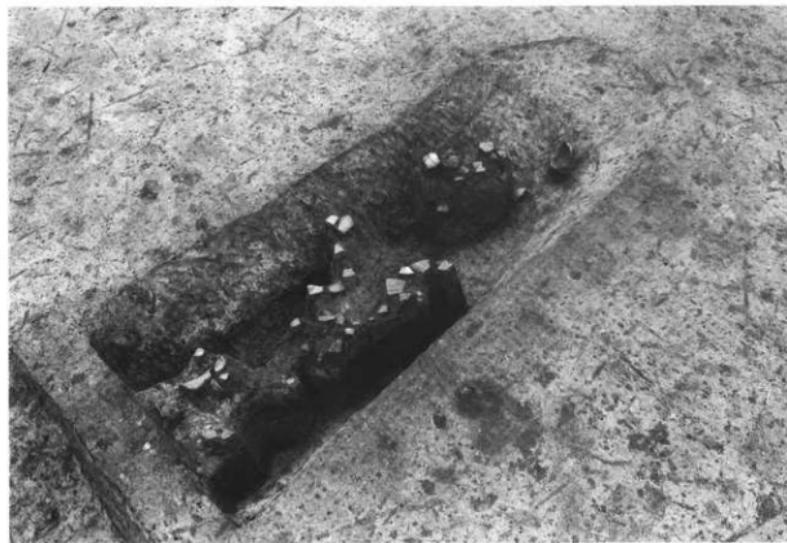
1. 全景（東上方）



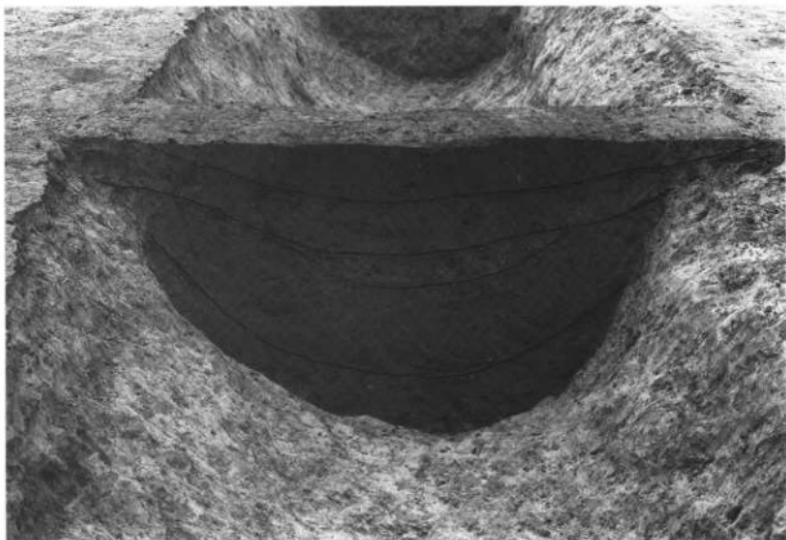
2. 全景（上方）



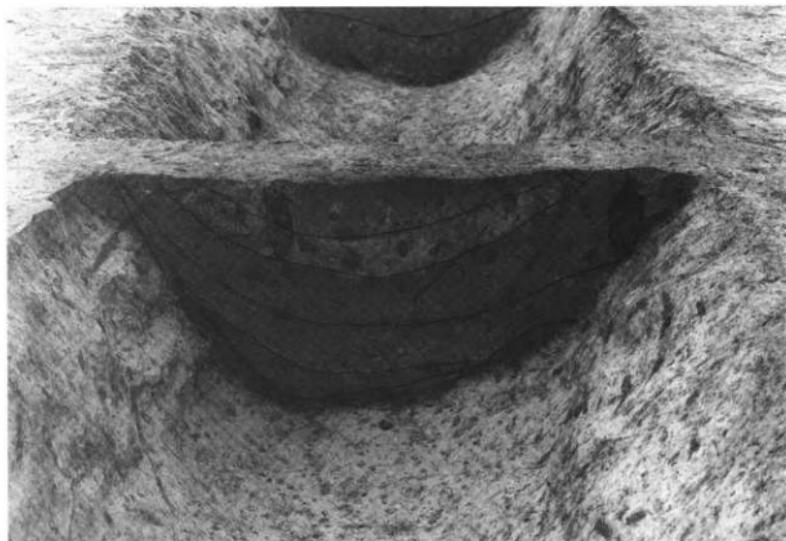
1. 土坑SK107全景(南)



2. 土坑SK107遺物出土状態(南西)



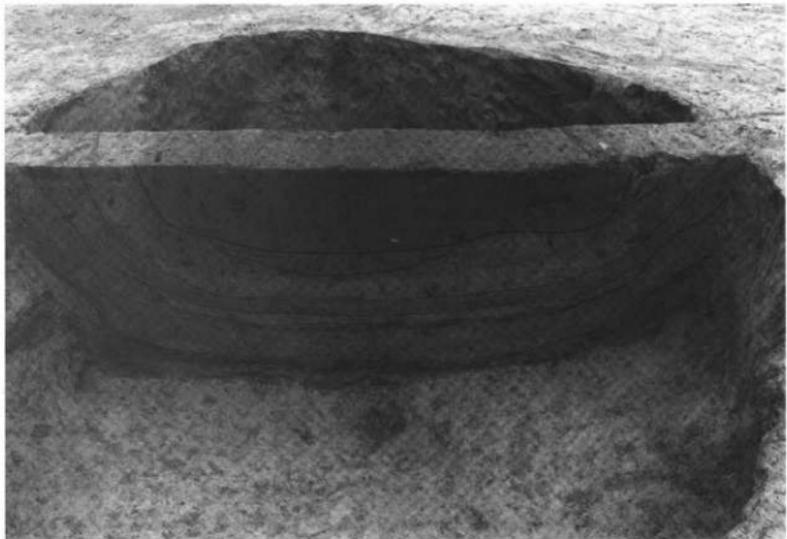
1. 土坑SK107土層断面（西）



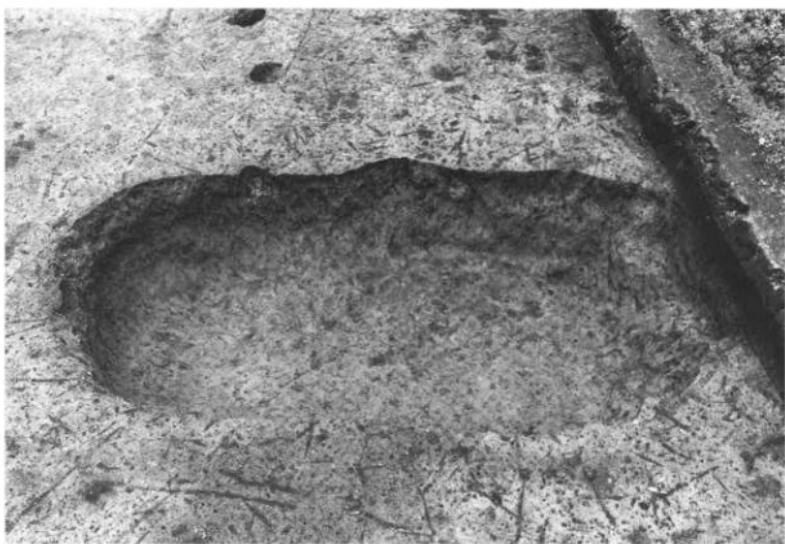
2. 土坑SK107土層断面（西）



1. 土坑S K110全景（西）



2. 土坑S K110土層断面（東）



1. 土坑 S K105全景（東）



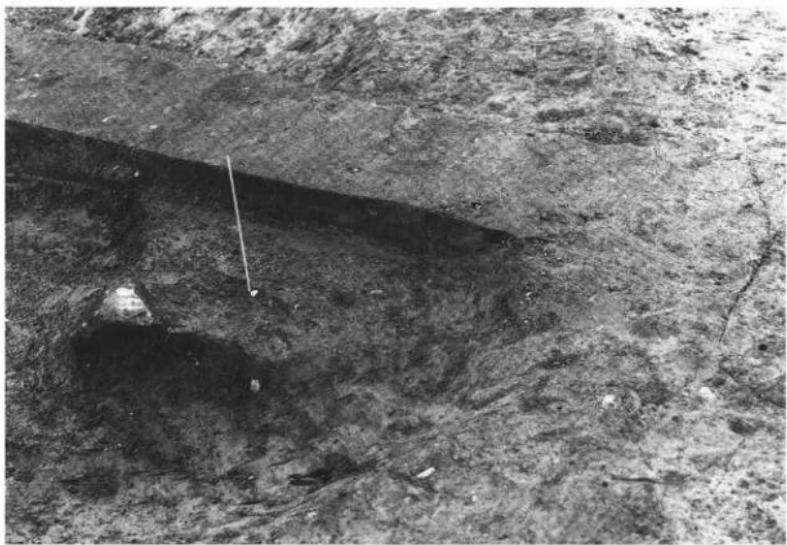
2. 溝 S D45土層断面（北）



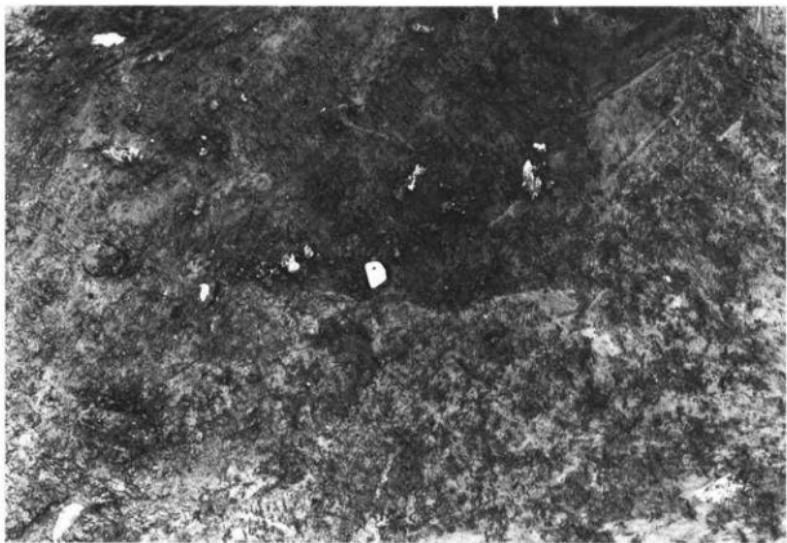
1. ヒシイ勾玉501出土状態（南西）



2. ヒシイ勾玉502出土状態（南東）



1. ヒスイ勾玉503出土状態（南西）



2. ヒスイ勾玉503出土状態（東）



101



118



131



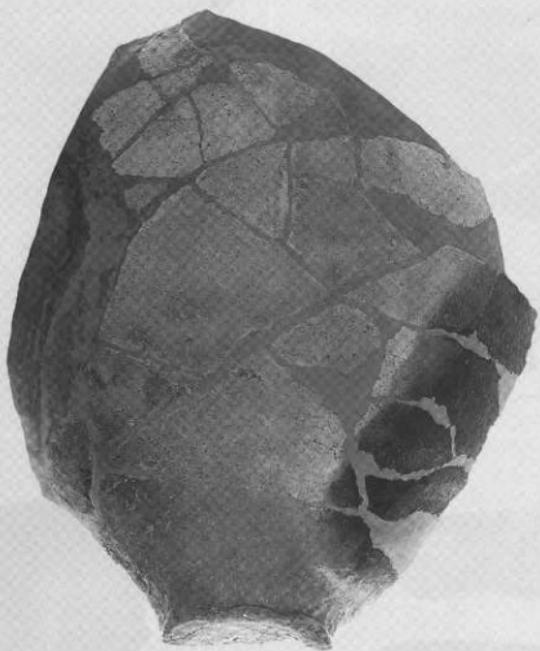
102



128



136

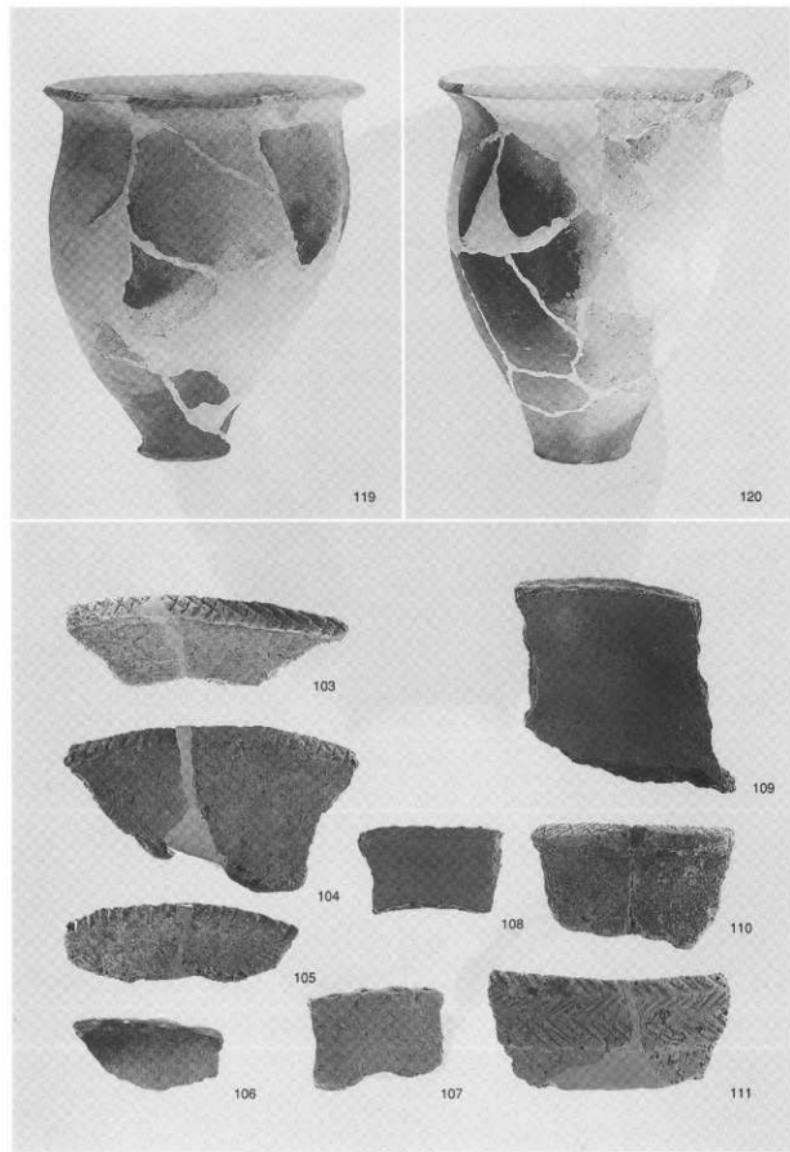


113

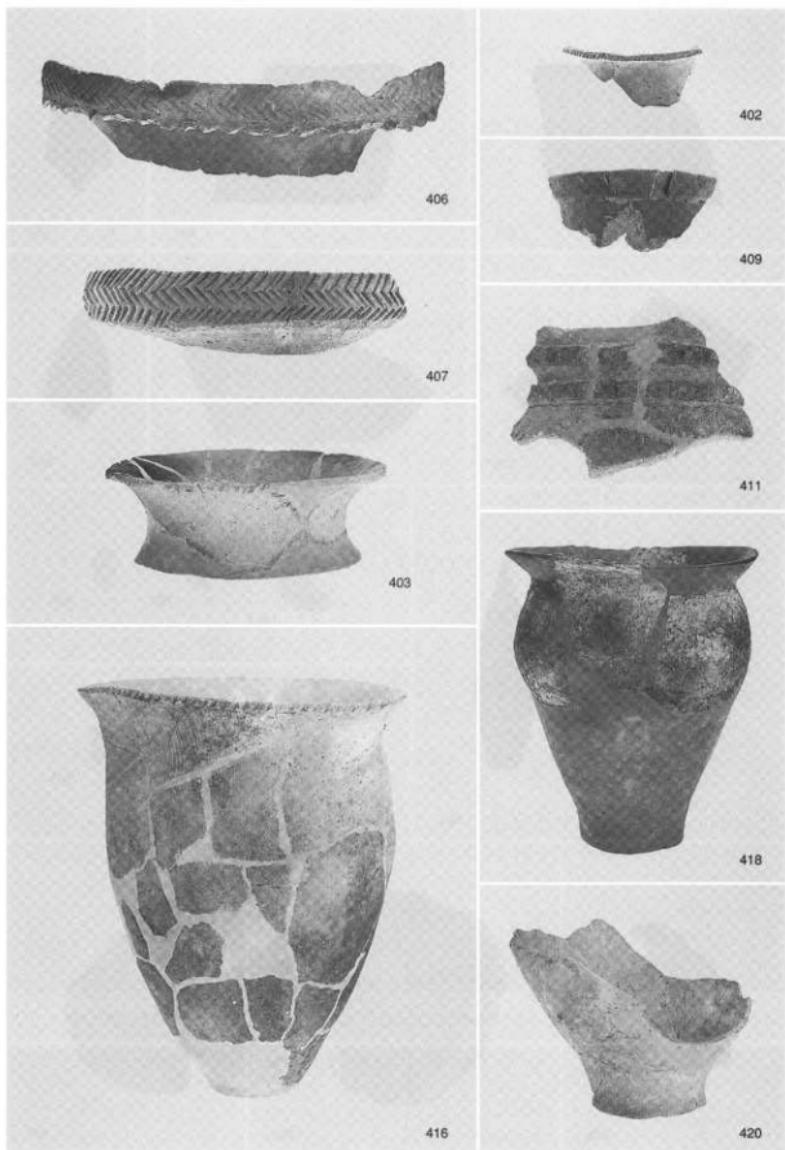


112

弥生土器

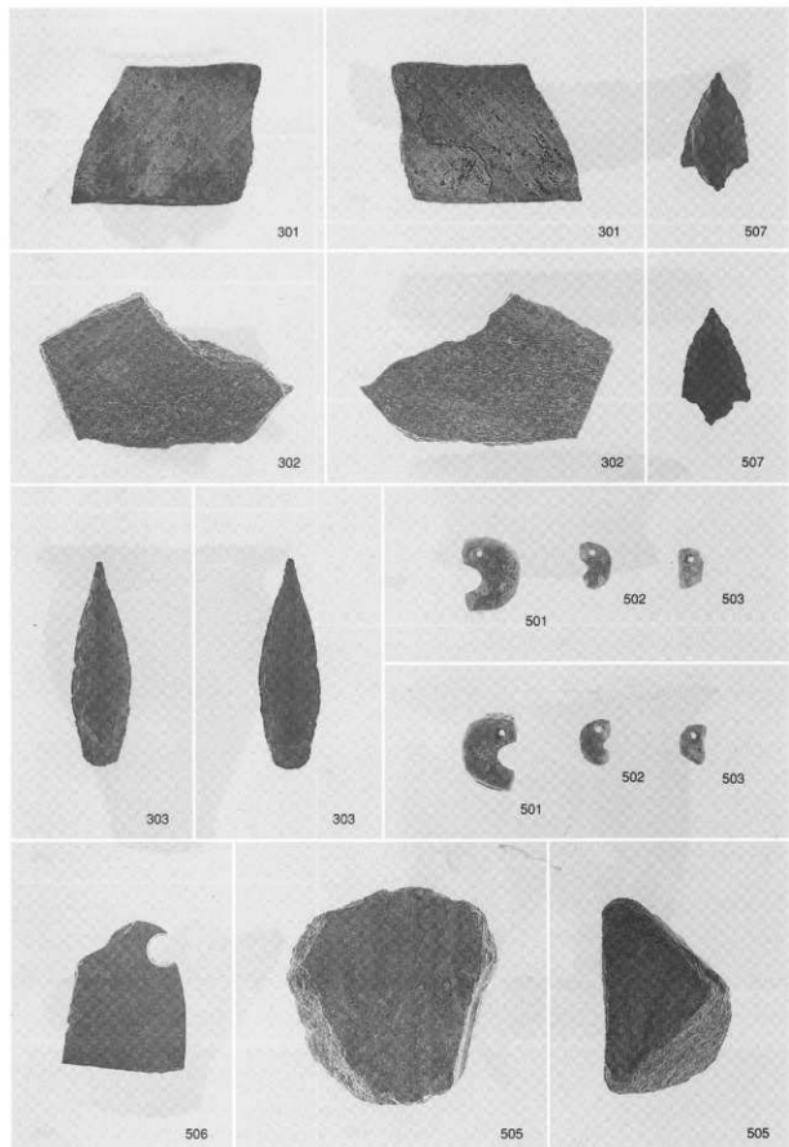


弥生土器



弥生土器

図版一六
遺物
旭建設・日本海東一ム地区



石製品

高岡市埋蔵文化財調査概報第29冊

石塚遺跡調査概報Ⅳ

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

1996年3月29日

印刷所 小商印刷株式会社

富山県高岡市羽屋町3
